

---

# 正直レコーダー

五月蓬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

正直レコーダー

### 【Nコード】

N6264P

### 【作者名】

五月蓬

### 【あらすじ】

物語は一つのICレコーダーから始まる。

『本音』を仕舞ったそのメモリは『嘔吐き』達を揺り動かす。  
それは恋？それとも打算？

これは素直に生きることを忘れた高校生達の本音と衝突の物語

……

## ブローグ ～嘔吐きレコーダー～（前書き）

はじめまして！五月蓬しがつよせきと申します！

ちょっとひねくれた内容ですが、恋愛ものです！

初めてで至らぬ点多いと思いますが、何卒よろしく願います！

感想、批評、指摘する点などありましたら、是非是非よろしく  
願います！

## ブローグ く嘔吐きレコーダーく

あいつは嘔吐きだ。本当のことなんてまともに話さない。その上、腹黒陰湿根暗ときたもんだ。質が悪いつたらありやしない。

でも、そんな姿を平気で晒していたからこそ、俺はあいつが俺にぶつけてきた悪態は『本当の気持ち』の顕れなのだと思っていた。

なのに、卑怯じゃないか。こんな言葉。

俺がおまえといがみ合って、睨み合ってきた日々は何だったんだよ？

ICレコーダーを握る手に力がこもる。

「嘘だつて言えよ……なあ！」

そうじゃなかったら、俺はどうしたらいいんだよ？

真実しか語らないICレコーダーは、ついに「嘘だよ」といわないまま、再生を終える。

ICレコーダーは初めて『嘘を吐いた』。俺は絶対に騙されない……絶対に……絶対に……！

俺は握り締めたその『嘔吐き』を怒りに任せて叩き付けようと、腕を大きく振りかぶる。

浮かぶあいつの顔を振り払うように……

## 1話 く打算的な出会い

私立拓沼高校<sup>しりつひらくぬまこうこう</sup>、そこは地元では大体中堅くらいに位置する極々普通の高校である。

目立つ部活もほとんど無く、極稀に個人種目の部活で優秀な成績を残す生徒こそいれど、高校自体が全国に名を轟かせるような事はない。

良くも悪くも普通なその高校は地元では『第二希望以下』、つまり『手軽な滑り止め』として受験される割合が多く、私立にしては割安な学費、充実した奨学金制度がその傾向をより強めている。

今年も新たな新入生を迎える季節。何も大きな転換点を迎えるのは、新入生だけではない。

『クラス替え』という意外と重要な転換点に在學生は一喜一憂する。今日は始業式。

憧れのあの人と一緒に、仲のいい友達と一緒にと、ハラハラしながらクラス分けの掲示に群がる生徒達。

騒がしい生徒は前方を陣取り、歓声や悲鳴をあげる。物静かな生徒は後方から覗き込み、そそくさと教室へと向かう。

どちらかというと後者に近い動きを見せ、新2年6組の飯嶋虎次<sup>いらいじまこうじ</sup>は中学からの付き合いの野吹健<sup>のぶきけん</sup>と共に、教室に向かう。

「またトラと一緒にかあ！何だか運命感じちゃわね！？……って馬鹿！気持ち悪いわ！どうせならカワイコちゃんと結ばれたいわ！」

「うるせーよ。こちとらお前の顔なんざ見飽きたわ」

「トラだけに『こちとら』』ってか？わははは！」

「上手くねえよ！」

虎次は面倒くさそうに野吹の頭をひっぱたいた。「痛え」と頭をさすりながらも、野吹はヘラヘラと笑っていた。

二人は昔からこんな関係である。ベツタリと仲が良い訳ではないが、何気なくくだらない話をできる仲。虎次にとつては野吹は鬱陶しくもあつたが、友達付き合いしやすい相手でもあつた。

「いや、でも本当によう！そろそろ俺も女の子とお付き合いしたいワケよ！」

「そろそろも何も別に焦ることないだろ？」

「ハア！？畜生、そりゃモテる男の余裕か？いいよなあ、女の子が勝手に寄ってくる男はよお！」

野吹はペシンと虎次の頭を叩く。

野吹の言うように、この男、飯嶋虎次はなかなか女子に人気がある。

極端に格好良いというより目立つ癖のないそこそこに整った顔立ちに、なかなかの運動神経、それなりの成績に、まずまずの社交性……それがこの飯嶋虎次を表すのにぴったりな表現であろう。

「勝手に寄って来ねーよ。お前と違って『人目』を気にしてる結果だよ」

虎次は全体的に見ればとても中途半端に見える。そんな特長のない彼には信念がある。

それは『無難に生きること』

『出る杭は打たれる』という言葉の通り、何かしら特長を持つ人間は誰かしらに嫌われる。

虎次は全てにおいて中の上から上の下に位置する事で『嫌われな人間』を目指している。その結果か、彼は好かれこそすれど、嫌われることはほとんどない。

「……トラって結構腹黒いよな」

「かもな。なににせよ俺は現時点では異性に興味ないからな。そんなの将来を考える時点で気にすりゃいいんだよ」

その生き方故か、虎次は異性に全く興味が無い。変に付き合えば無駄に恨みを買っし、男共に女誑しのレッテルを貼られるのも癪だ。そんな理由で彼は恋愛とは距離を取っている。

「…ま、お前みたいな猿はそんなこと関係ないか？」

「ひでえ！お前の悪口バラまいてやる！」

「無駄だつての」

虎次は意地悪く笑ってみせる。野吹もゲラゲラと笑う。妬みを持たず何でも笑い飛ばせる野吹は虎次が本音を語れる数少ない人間だった。

教室が見えてくる。二人は笑うのを止め、新しい教室へと入っていく。

新しい学校生活の始まりである。

「眠い…校長話長すぎじゃね？俺、ずっと寝てたわ」  
「だな」

面倒な始業式も終わり、諸々の連絡も終わり、早くも学校初日は

終わりを迎えていた。生徒はまばらに下校しだしていて、それ以外  
は教室に残り新しいクラスメートと談笑している。

虎次と野吹も教室に残り、適当な話をしながら、教室のクラスメ  
ートとも少し話をしていた。見知った顔も少なくないし、フレンド  
リーに話し掛けてくるクラスメートもいて、早速クラス内での居場  
所を確保する。

一方、そんな彼らとは対照的に、居場所を確保できない惨めな生  
徒も勿論いるようで、早速残酷な恒例儀式が行われているようだ。

「なんか喋れよ！」

柄の悪い女の声が教室に響く。虎次、野吹は勿論のこと、教室に  
残る生徒全員が声の方向を見た。

そこには一人の女子生徒の机を取り囲む三人の女子生徒がいた。  
一人囲まれた大人しそうな女子は俯いて、ただ黙っている。頭に手  
を乗せられ、ぐしゃぐしゃに髪を乱されても文句一つ言わず、耐え  
ているようだった。あまりにも痛々しいその光景に生徒達は目を逸  
らす。誰もこんな事には関わりたくない、そう言わんばかりに。

「あー…伊成もこのクラスかよ」

「伊成？」

虎次、野吹と話していた男子生徒の言葉に虎次は反応する。それ  
に対し野吹は『伊成』という女子について得意げに語りだした。

「『伊成月音』、元2組のいじめられっこだ。根暗らしいけど、俺  
は結構可愛いと思うな〜」

「お前は女子にだけは詳しいな……可愛いと思ってんなら助けてや  
れば？」

「俺がいつたら軽くあしらわれるっての！そういう王子様ポジションはモテ男がやれよー！」

「モテないっての。ったく、しゃーねえ。俺、先帰るわ」

虎次は鞆を手に席を立つ。そして、まっすぐに女子集団の方向へと向かう。

「おい、野吹。飯嶋の奴、何する気だ？」

「ん？ああ、アイツハセイギカンガツヨイカラナ」

棒読みの台詞で野吹が首を振る。虎次がやる事を分かり切っている野吹はひらひらと手を振り、検討を祈った。

「なあ、それ位にしとけよ」

「ああ！？」

女子集団のリーダーは声を荒げる。しかし、虎次は引く事なく、ぐいっと女子集団を押しのと、俯くいじめられっこ、伊成の手を掴んだ。

「来い」

「ちよっ……！待てよ！」

女子集団の制止も無視し、伊成の机の上の鞆を手に取り、虎次は伊成を連れ、教室から立ち去った。

女子集団を含め、教室全体が呆然としている。事情を知る野吹だけが、ニヤニヤと笑いながらパチパチと手を叩いた。

虎次は人目の付かない校舎の裏口付近に伊成を連れてきた。そして、その手を放すと、持ってきた鞆を伊成にくいつと押し付ける。

「ほらよ」

「……ありがとう」

「礼なんかいらぬ。ただお前に言っておく事がある」

虎次は腹黒い男である。ただの善意で人を助ける程、お人好しではない。彼は『取るに足らない』と判断したいじめられっ子、伊成に冷たい言葉をピシヤリと叩きつけた。

「俺がお前を助けたのは『体裁』の為だ。好意や善意の為じゃない。勘違いするな。イジメを黙認したあの間抜け共と同罪にならないのだ。俺は俺を良く見せるためにお前を助けた。お前なんかには微塵も興味ない。分かったら、俺に変な期待持つなよ？じゃあな」

虎次はこの伊成というクラスの底辺に勘違いされないように、突き放した。変な期待を持たれるのが気に食わないからだ。どうせこんな奴に何を言っても大丈夫だろうと判断し、虎次は遠慮なく『本音』をぶつけた。

こいつはきつと俺の言った事は黙ってる、そう高をくくって。

こうして、虎次は新学期早々にいじめられっ子を助けた善人になるはずだった。

「待って」

「……なんだよ。勘違いすんなって……」 『俺がお前を助けたのは』

体裁』の為だ。…』

聞こえてきたのは虎次の声。虎次は何か寒気を感じ、伊成の方を振り向く。

伊成の手にはICレコーダー。そこから響くのは虎次が先程まで伊成に向けて放った『本音』。伊成は口元を意地悪く歪めた。

「お前、それ何……」

「私に余計な事、話さなきゃ良かったのに。あなたの本性、分かっちゃった」

このミスは虎次にとって致命的なものだった。この『本音』をばらされたら、周囲の見る目は変わるだろう。虎次の額を汗が伝う。

「おいどういふ事だよ……！それ、どうするつもりだよ！」

「……契約しない？」

「……契約？」

虎次は気づいていなかった。目の前のいじめられっ子が、自分よりも性格の悪い腹黒女だということに。そして、それに気づいた時、それは既に遅すぎた。

「……私をイジメから守って。そしたら、この『本音』、秘密にしてあげる」

いじめられっ子、伊成月音は邪悪に微笑んだ。

うつかりと口から零れ落ちた虎次の『本音』。それが、この奇妙

な学校生活の始まりだった。

1話 く打算的な出会いく (後書き)

ここからスタートです！

ちよつと長くなってしまいました……

次からは一話の長さが短くなると思います！

## 2話 ー 第一歩 ー

「……お前、それギャグで言ってるのか？」  
「違うわ！お前と一緒にすんな！」

それは虎次が伊成いなりつきね月音に『契約』を持ち掛けられた翌日のこと。  
朝、北校舎と南校舎を結ぶ渡り廊下に虎次と野吹の二人はいた。  
虎次は野吹を呼び出し、昨日の出来事を話していた。

虎次にとつて、野吹は意外と頼りになる相談相手である。別に野吹が特別に問題解決の能力に長けている訳ではないが、虎次とはまた違った立場にいる野吹は時にはかなり頼もしい。

「うーん、意外だ。伊成月音、ただの根暗だと思ってたが……裏がありそうだな……いいな！」  
「いいな！……って何がだよ！」

にやにやと笑いながら、野吹は顎に手を添える。

「裏がある女つて良くね？」  
「人事だから興味なしってか。いいと思うならお前が面倒見るよ」  
「え？いいけど？」

意外な返事に虎次は一瞬、野吹の言った事が理解出来なかった。

「は？」

「いいけど？俺的ルックス評価だと、伊成は結構いい方だしな。何

でイジメ受けてるか不思議なくらいだ。お前が紹介してくれるなら喜んでお付き合いますさ！」

「お前：見境なしか？」

野吹は女好きである。というより、ストライクゾーンが異常に広いと言っべきか。彼自ら「女性なら揺りかごから墓場まで」と得意気に語る程である。（そのがつつき方が彼が女子に距離を置かれる原因だと本人は知らないが）

その事を踏まえて虎次は呆れ顔を見せたが、意外にも野吹は極めて真面目な表情で言葉を返した。

「マジだつて。トラ、ちゃんと伊成の事見たか？ありや結構なレベルだぜ？ただいつも伏し目がちだから薄暗い雰囲気するだけだろ。お前を『雰囲気イケメン』とすると、伊成は『雰囲気ブス』って所か？」

「何だそりゃ……？」

分からないかなあ？と得意気な表情で首を振る野吹。その顔にイラっとする虎次は眉間にしわを寄せる。

その表情を見た野吹はにやりと笑うと、虎次の肩をポンと叩き、校舎に向かって歩き出した。

「ま、不自然じゃない程度に協力してやるわ。伊成に宜しく言っといってくれや」

頼りになるような台詞を残す野吹の得意気な後ろ姿に微妙な感覚を覚えながら、虎次はその後を追って教室へと戻る。

虎次と野吹が教室に戻った頃には、既にクラスメートの殆どが教室にいた。前日にも遅刻した顔ぶれの姿が見えないくらいで、勿論問題の女子、伊成月音も静かに席に座っていた。例の女子グループはリーダー格を囲んで談笑していた。一瞬、虎次に目を向けたが、すぐにそっぽを向いてしまう。

虎次が席に着くと、昨日知り合った男子二人がすぐに近寄ってきた。

「飯嶋ー！昨日、どうしたんだよー！いきなり伊成連れてってー！」  
「知り合いじゃないんだろ？何でわざわざ助けたんだ？」

「……いや、まあ……見苦しいからな。気分悪いだろ？見てるこつちが」

あえて『善意』は語らない。たった一言、自分の『善意』を語れば、途端にそれは安っぽくなってしまふ。虎次はそう考える。『人の為に』と話す人間と、『自分の為に』と話す人間、どちらが『本音』を言っているように見えるか？虎次は間違はなく後者と言っただろう。

飯嶋虎次はひねくれ者なのである。

「まあ、それもそうだな！俺も正直、あいつらは気に食わねー！」

「止めとけ。目え付けられるぞ」

「は？何？お前、ビビっちゃうワケ？」

「ビビってはいない。ただ面倒だろ。ああいうの」

ワイワイと虎次の席周りで口論しだす二人だったが、チャイムの音が聞こえた途端に、パツと言葉を止める。

「…よし、じゃあ後で度胸試しだ！」

「望むところだ」

結局、何を話していたのが、有耶無耶になったまま二人は席に戻る。虎次はふうとため息をつくど、肩の力を抜いた。

そして、背中を丸め、ピクリとも動かない伊成月音の後ろ姿を見た。

「おはようさん！」

筋肉質な大男が教室に勢い良く入ってくる。担任の郷田は大きな声で一日の始まりを告げた。

授業初日ということもあり、どの授業も大したことはしないように、苦もなく一日は進む。

虎次は後方の席から教室全体を眺める。

虎次の視線は斜め前方、黒板からかなり近い位置に止まる。そこにいるのは伊成月音。虎次は問題の彼女をまじまじと見つめた。

可愛い……か？本当に？

野吹の言った事が気になり、虎次は何度も、確かめるように、その容姿を見た。弱々しい後ろ姿、僅かに覗く横顔はどこか疲れ果て

ているように暗く、不健康にも見えるその蒼白な肌が目の下のクマを一層際立たせている。しかしよく見ると、その目鼻は意外にも整っており、確かに『不細工』というには無理があった。顔色を強調する飾り気のない黒そのままの髪が、薄暗い幽霊のようなイメージを与えているが、前髪を上げれば、大分印象が変わるのでは？虎次は考えた。

昼休みにでも試してみるか。

勿論、それでイジメが解決する訳ではないが、キツカケは積極的に作った方がいいだろう。虎次は自分なりにその一步を決めた。

何時の間にか、自分が伊成の問題に意外なまでに真剣に取り組んでいる事に、虎次はこの時気付いていなかった。

「じゃあ、今日はここまで。一年の内容、ちゃんと復習しとくように！じゃないと痛い目見るよー」

数学教師、黒須がにやにやと笑いながら教科書をまとめて、教室を出て行く。その後直ぐに、生徒達はどっと騒ぎ出した。虎次のそばに直ぐに野吹が歩み寄り、声を掛けてくる。

「トラー、昼、どうするよ？」

「購買行く。後、ちよつと付き合え」

野吹は不思議そうな表情を浮かべる。虎次はつんつんと指を指す。野吹はその方向、教科書を仕舞い、小さい弁当箱を取り出す伊成の方を見て、「あ〜」と声を漏らした。

「じゃ、俺も購買にすっかな。なら善は急げだ！早くしないと、メロンパンがー！」

野吹はダッシュで購買を目指す。虎次はゆっくりと腰を上げると、焦らずに購買に向かった。

「何処行ったアイツ……」

虎次達が教室に戻ると、そこには伊成の姿は既になかった。仕方無く、二人はあてもなく校舎中を歩いてまわる。

「ま、そりゃ出て行くわな。居心地悪いだろうし、あいつらに席取られてたし」

伊成の席周りは女子グループに占拠されていた。確かにそこにはいないだろう。ならば、伊成は何処に行ったのか。

「まさか、噂の便所飯！？よし、俺が女子トイレを見てまわろう！」「やめろ」

虎次は野吹のジョーク（野吹の場合は本当にジョークか微妙ならインだが）を一蹴して、渡り廊下に出る。

そこには手入れが今一つ行き届いていない草が生い茂る中庭があった。人目の付かない場所を考えた虎次は、すぐにここが思いついた。草のカーテンに隠れて、一つのベンチがある。

多くの生徒が知らないこの隠れ家で伊成はちまちまと弁当をつつ

いていた。

「お、いたいた」

「わっ！……な、何？」

伊成は声を掛けて初めて此方に気付いたようで、驚き、素っ頓狂な声をあげた。

「ったく、何処で飯食ってんだ。ちよつと席空ける」

「俺もしつれ〜い！あ、俺、野吹健！よろ！」

伊成は突然の出来事にぼかんとしたまま、席を空けた。

「ああ、伊成ちゃん、話なら聞いたから。俺も協力しちゃうぞ！わはは！」

「お前…女子の前でテンション高過ぎ」

ずかずかと踏み込んでくる二人に伊成は戸惑いを隠せない。そんな伊成を置いてきぼりにし、虎次はピツと指を立てて、ピシヤリと言いつつ放つ。

「第一回作戦会議だ。文句ないな？」

ここから飯嶋虎次と伊成月音の長く、波乱だらけの『契約』は正式にスタートした。

## 2話 〱 第一歩 〱 (後書き)

感想、批評、指摘、何でもお待ちしています！

### 3話 悪友

さっさと買ってきた焼きそばパンを口に押し込み、虎次はゆっくりとちまちまご飯を口に運ぶ伊成に早速話し掛ける。

「お前、その鬱陶しい前髪上げる。それで大分印象が違う」

横目でちらりと虎次を一瞥すると、伊成はすぐに視線を弁当に落とした。まるで「食事の邪魔しないで」と言わんばかりの態度である。虎次は軽くプツンときたが、それを口から発する間を奪うかのように、野吹がメロンパンをガジガジとかじりながら、声を上げた。

「トラ、お前……デコフェチか!？」

「バ、バカ野郎!そんなんじゃねえ!」

「うわぁ……」

伊成の小さい声がやけに大きく響く。虎次がその声につられて伊成の方を見ると、やたらと冷たい目が虎次の方を向いていた。

「違う!」

「……今日、やたらとこっちを見てたのって……?」

「トラ……お前もいい趣味持ってんじゃないか……。大丈夫。俺にはその気持ち、解るぜ……」

「やめるお!同情すんな!それに伊成!お前は勘違いしている!あれはだな……」

「……見てた事は否定しないんだ」

「トラ……」  
「やめろおお！」

このままでは不味い。虎次は直感した。パニック状態に陥り掛けている虎次は、起死回生のビンタを野吹の頬に叩き込んだ。バチイーンといい音が響き渡る。

「ギャアアア！」

「お前もう黙れ！」

「女の子にも打たれた事ないのに！」

野吹が涙目でそう叫ぶと、伊成は深く溜め息をついた。弁当箱の蓋を閉めながら、ぼそりと小声で喋り出した。

「冗談と悪ふざけはここまでにするとして……結局何？」

「冗談だと？お前、さては俺をおちよくってたのか？そんな文句をかみ殺して、虎次は話を仕切り直す。」

「二度とケチ付けられないように丁寧に話すぞ？質問あったらすぐにしる。あと野吹、お前は黙ってる。てか、何が『不自然じゃない程度に協力してやる』だ？どんだけ不自然に伊成に絡んでっただよ！」

「ハハハ」

そのわざとらしい笑いにイラツとする虎次だったが、野吹にこれ以上絡むと面倒と考え、自分の言わんとしている事を伊成に丁寧に伝えた。

「……わざわざ説明しなくても、言ってること位分かるけど」

「お前……本当にデコフェチの件は俺をからかったただけか……！」

わなわなと震える虎次を突っぱねるように、伊成はすぐに意見を返した。

「私は『質の悪い嫌がらせから守って』と言ったのであって、別に『イジメを無くして』とは頼んでない。でもその『善意』、有り難くいただくとしても問題点が多数」

突然流暢に喋り出した伊成に驚きつつも、虎次と野吹は黙って話を聞き続ける。

「まず、『昼休み明けからそんな事したら不自然』。仮に明日からだとしても不自然。いいタイミングでしたとしても、その時は『色気づきやがって』と言われるのがオチ。仮に受け入れられても、その時はそのキツカケとして、あなたが視線を集めるかも知れない。厄介事は嫌でしょ？他にも色々あるけどこれで十分でしょ？」

予想だにしなかった言葉の雪崩に虎次は口をポカンと開けて、黙ってしまふ。それに対し、野吹は全く驚きもせずにがしがじと三個目のメロンパンを外側からかじりながら、ぶほつと笑った。

「伊成ちゃん、めっちゃ喋るな！いいねえ！俺達にだけその素顔を見せている……そういうの、何か良くね？」

茶化すように笑う野吹を、伊成は不快感丸出しで睨みつける。その目を見ても尚、野吹はニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべていた。伊成はそれに言及することなく、その不満を黙りこくっている虎次に投げかけた。

「……ねえ、何でこの人に話したの？」

「え？」

「この事、他の人にバレてもいいの？」

伊成はポケットに忍ばせていたICレコーダーを取り出し、それを突き出す。

その行動と表情からは容易に、『伊成の不満』が指す意味を理解出来た。

伊成は野吹が信用出来ないのだ。

この人は契約の事をふざけ半分で他人に話すのではないか？この人は私を馬鹿にするためにここに来たのではないか？野吹の全てを疑うような目に、虎次は少し言葉を詰まらせたが、すぐにムツとして言葉をぶつけた。

「こいつはそんな奴じゃねえよ」

意外な虎次の威圧的な返しに、伊成はびくりと眉を動かした。その後、表情一つ変えずに伊成はじつと虎次を見つめる。虎次はその顔を見て、少し強く言い過ぎたかと後悔する。

何か声をかけるべきか？そう考えるが言葉に詰まる虎次。一方の伊成も少し気まずそうに口をもごもごと動かした。

そんな膠着状態の二人を見て、何を思っただか野吹は突然、突き出

されたICレコーダーをぱつと取り上げた。

「あつ！やめ……！」

伊成は明らかな焦りを見せる。虎次でさえも、親友の意外な行動に驚きを隠せなかった。

唾然として、その行動を見やる虎次を余所に、野吹はレコーダーを弄り、口を近づけた。

『女子更衣室の侵入者事件、あの犯人は、何を隠そうこの俺、野吹健だったのだ！』

突然の野吹の一言はさらに虎次と伊成の混乱を深める。

『あ！お前、何録音してんだー！』

野吹は言い終わると、伊成にICレコーダーを突っ返して、にっ  
と笑って見せた。

「これで俺も知られちゃ困る事を伊成ちゃんに握られちゃった訳だ。これなら、伊成ちゃんも俺を安心して俺を使えるだろ？」

伊成は口をぱくぱくと動かし、目を泳がせる。暫くの動揺、その後にようやく伊成は震える声を絞り出した。

「……どうして」

「伊成ちゃんを助きたいからだよ」

野吹の言葉に伊成が何を思ったかは分からない。伊成はただただ、その唇を噛み締めた。

「ちよいと臭かったかな？あはは！ただ伊成ちゃんにお近づきになりたかっただけだって！」

野吹は冗談めかして笑う。そして、虎次の背中をばんと叩き「お前も伊成ちゃんにキツイ事言うなって」と注意した。

「んじゃ、今日はこれで解散！次からは俺も混ぜるよな！」

野吹は虎次と伊成の険悪な雰囲気気にかけていたようで、とりあえずの解散を提案する。半ば強引に虎次を連れて立ち上がり、「じゃ、また後で！」と短い挨拶を伊成に送り、足早に立ち去る。

暗い空気を、無理矢理に破った野吹。そんな彼に虎次は感謝しつつ、後を去る。

そうして去る彼らを見送る事もなく、伊成はただただ俯いて、彼らに届かない言葉を小さく漏らした。

「……………」  
「ごめんなさい」

#### 4話 く勝手な友情く

結局、虎次は伊成の為に何が出来る訳でもなかった。

たまに極端ないじめを目撃した時、軽く「何やってるんだ？」と第三者がいじめを発見したように装い、女子グループを散らす程度。肝心のいじめがなくなる筈もなく、陰では相当酷い事もされているらしい。

その点、野吹の協力は視線が増えるという点で、僅かながらプラスになったとも言える。

とはいえ、野吹も大つぴらに伊成を助ける事はない。野吹もそれなりに色々考えているようで、女子から煙たがられる自分が、下手に伊成に近づく事がいじめの助長になることを危惧しているようだ。

「情けないけど、俺が出来る事なんてあんまないよな」

レコーダーに「嘘」を吹き込んでから3日、野吹が己の無力から弱音を吐いた事は、虎次を酷く驚かせた。

このお調子者が、此処まで思い悩むとは……虎次は「契約」という名目で、嫌々人助けをする自分が汚く思えた。

まだ彼は、そんな思いを抱く事が、真剣に悩んでいる事を意味していることに気付かない。

彼等の悩みを知ってか知らずか、当の伊成は、物陰ランチに2人が参加する事を拒まなくなっていた。

といつても、積極的に話しはしない。野吹のマシングントークに相槌を打つ程度だ。しかし、それでもかなりの進展だと、虎次は思う。

伊成の心を僅かに溶かした野吹に、彼はただただ感心するだけだった。

どんよりとした表情でパンを握り締める虎次。その表情を伊成は見逃さない。

「……してる」

「……ん？」

伊成は弁当に視線を落として、ぼそりと何かを呟いた。

どこか照れくさそうな表情を浮かべている伊成の言葉に、虎次は首を傾げる。

「何だよ？」

「……感謝してるって言ってるの！」

伊成は、少しだけ声を大きくして、箸で生姜焼きをむんずとつまむと、虎次のアンパンにめり込む程の勢いでプレゼントした。

「おまつ……！俺のアンパンに何を！？」

「あげる！」

「生姜焼きにあんこが合うか！」

ムスツとそつぽを向く伊成に虎次は血管を浮かび上がらせる。  
その様子を見て、ムツと口を尖らせる野吹。

「トラだけズルい！伊成ちゃん！」

「……分かった。あげる」

伊成は溜め息混じりに、生姜焼きを野吹のメロンパンに置く。虎次の「何故パンに置く？」というガヤを無視して、野吹は歓喜の雄叫びを上げた。

「ヒヤッホー！伊成ちゃんのくわえた箸から貰った生姜焼きだー！」

「……は？」

「……え？」

ぴたりと伊成は箸を止める。

アンパンから引っ張り出した生姜焼きを既に食べ終えた虎次が動きを止める。

追い討ちをかけるように、野吹は変態の発想を展開する。

「関節キツス、戴きますッ！」

「イヤーッ！！」

伊成の悲鳴。

ブスリ、と野吹の額に箸がめり込む。

「ギヤアアアアッ！」

野吹の悲鳴。

伊成はクルリと身を翻して、虎次の喉元を鷲掴みにする。顔を真っ赤にして、目を潤ませながら、地の底から響くような声を響かせる。

「吐ああけええええッ！！」

「うげふッ！？ちょ、落ち着け……！死ぬ！死んでしまっ！」

「コケーーーーッ！」

呼吸を封じられた虎次の、鶏の如き悲鳴。

断末魔の嵐が吹き荒れる混沌の中庭、後に七不思議に数えられる中庭の伝説は此処から始まった……

息を切らす3人。ひとまず絶叫の嵐は収束したようだ。

呼吸を整え、虎次はやつとの思いで声を発する。

「はあ……はあ……お前、メチャクチャ元気じゃねーか……！何処が根暗だ……」

「別に、根暗だと名乗った覚えはないけれど」

「そのテンションでいたら、嫌がらせとかされないだろ……」

伊成はムスツとして目を背ける。

虎次の言葉に興味などないようだ。

虎次がその態度に文句を付けようとしたその時、額を抑える野吹が素っ頓狂な声を上げた。

「こ……これだっ!」

「何?Mにでも目覚めたの?」

「伊成ちゃん酷い!」

額から手を離し、野吹がうわーと泣き声を上げる。気の毒に思ったのか、虎次は悪友をフォローする。

「伊成、こいつは元からMだ。目覚めたは失礼だろ」

「うわあ」

「やめて!トラ、いらんフォローやめて!」

野吹、涙目の懇願。

「……で、結局何?」

「うわーお。伊成ちゃん、切り換え早っ!」

「じゃあそろそろ教室戻るけど」

「待って!」

立とうとする伊成の腕を掴んで、本気で嫌そうな顔で手を弾かれて、素で傷付きながらも、野吹は発言する。

「名付けて、『友達百人出来るかな作戦』!」

「……突然何?気でも狂ったの?」

「伊成ちゃん、一々言い方キツ過ぎ!確かに脈絡無視した俺も悪いけどー!」

虎次は「嬉しい癖に」とフォローを入れようと思ったが、野吹の  
凄い睨み方、まるで「男からの辱めなんざ受けたかねえんだよ」と  
でも言わんが如き視線を理由に自重した。

野吹は突然提案したその作戦を解説する。

「嫌がらせの原因つてさ、結局は集団に馴染めてないって事だろ？  
それで今までのやり取りで思ったんだけどさ……伊成ちゃんって別  
に喋れない訳じゃないよね？冗談だって言えるでしょ？」

野吹の言う事には虎次も納得出来た。所々、無愛想で刺々しいが、  
根暗とは言い難い。

それこそ、今の虎次達との奇妙な関係でなく、心の許せる友達と  
なら、もっと話せそうだとも思える。

虎次の発想は、どうやら野吹と一緒にだったようだ。

「だから、そういう所をあいづらにも知ってもらえればいいと思う  
んだ。その為の第一歩として、俺は女友達を作る事を提案したい！」

一瞬、伊成が怪訝な表情を見せる。

「その友達経由で、伊成ちゃんを知ってもらおう！最終目標は友達百  
人だ！」

野吹の意見は虎次も分かった。しかし、彼には伊成がその提案を  
飲むとは思えなかった。

その予想は的中する。

「無理」

即答。

虎次は分かっていた。しかし、一応理由を尋ねる。

「何でだよ」

野吹の提案があまり現実的でない事は虎次も認めている。

始めの1人、人間関係を築く上でそれが、『百人目』を成し遂げるよりずっと難しい事を。

そもそも、あんなにも哀れな状況にあつて、誰も助けに入らない時点で、伊成が周囲から見捨てられている事は明らか。

だからこそ、友達作りなんて今更だ、と思うのも無理はない。

しかし、何でも最初から拒む伊成の姿勢が、虎次は気に食わなかった。

しかし、虎次は自分の考えが、思いの外ずれていた事を思い知らされる。

伊成は、少し暗い表情で呟いた。

「だって……迷惑がかかるから」

伊成は消極的で、悲観的な人間だと思っていた。

それは少しだけ違った。

彼女は自分の為でなく、他人の為に諦めている。

「いじめに巻き込んだじゃう……それに、私に友達になるだけの価値がない」

虎次は気付いた。伊成は限り無く自分に似ているのだと。

自分の価値を他人に見出す。他人の目を気にする。他人の評価を意識する。

伊成は虎次と同じ『人任せ』の人間なのだ気付いた。違いはある。よく見られようとする虎次に対し、伊成は見られるがままにあるうとしている。

だからこそ、自分を卑下し、人から距離を置く。

「……つたく、ふざけんな」

虎次は苛立った。

「俺には迷惑かけてるくせに、今更何言ってるんだ」

「……」

「おい、トラ。お前……」

「お前は黙ってる」

割って入ろうとした野吹を突っぱね、虎次は続ける。

「お前は価値で人を選ぶのか？」

「私には人を選ぶだけの価値がない。だから、私は……」

「他人様が思うがままに動くってか？」

伊成は黙る。しかし、虎次は構わず続ける。

「受け身になってんじゃねえよ。理解される努力もしないで、諦めたような口きくな」

「……」

「自分が嫌われ者だと思ってるなら、いつそ強引に友達作っちゃまえ。ウザいと思われたって、お前は構わないだろ？自分がウザい奴だつてんなら、他人に迷惑かけて当然じゃねえか」

パチンと伊成の額にデコピン一発。虎次は自分らしからぬ喝を入

れた。

「開き直つちまえ！」

伊成も野吹も、ぽかんと聞いていた。何とも形容し難い表情を見て、虎次ははつとする。

「……ま、まあ俺にしたみたいにさ、弱み握つて『友達になれ』つて脅しちまえばいいんだよ！理解を得るのは後だ！」

「……第一印象最悪で友達なんて出来るとでも？あなただつて私のこと……」

「べ、別に俺は友達になつてやったつていいけどな……お前の事嫌いつて訳でもないし」

何言つてんだ俺！と、虎次は自分から言つておいて赤面した。

虎次は伊成が嫌いだ。第一印象最悪だ。突然口からこぼれた思わぬ一言に、虎次自身が動揺する。

伊成はじとつとした目で、虎次を見て、鼻で笑った。

「……言つてて恥ずかしくないの？」

「う、うるせー！」

やっぱりこいつは嫌いだ。虎次は思う。伊成は顔真っ赤の虎次を一瞥して、席を立つ。

「……ま」

そして一言。

「……そこまで言うなら努力はしてあげるけど」

虎次と野吹は顔を見合わせた。

伊成は自分で何を言っているのか分からなかった。  
無駄だと分かっているのに、何故あんな言葉を返したのだろうと  
悔やむ。

それに、もとよりあんな契約を持ち掛けた理由は、今の状況を改  
善するためではなかったのに。

しかし、意図に反して流れ込む優しさに彼女は逆らえなかった。

甘受する自分に嫌悪を抱きながら、伊成は翌日を迎えていた。

どうしよう、何をすればいいんだろう、伊成は思わず口をついた  
『努力』という言葉に思い悩む。

まずは挨拶から？「おはよう、おはよう」と一人で何度か呟く。  
暫くぶりに家族以外と話すと考えると、噛まないで喋れるか不安  
になる。

……って、何してるんだか、私。と、伊成は急に恥ずかしくなっ  
た。

真面目にあいつの言ってた事やろうなんて、馬鹿みたい。

「何一人で喋ってるの？キモッ！」

あー、と伊成は何時の間にか席を取り囲むように立つ女子グルー  
プを見回した。

どうやら、珍しく早めに登校したのが災いしたらしい。普段はあまり早くに來ない伊成は、女子グループが早くに學校に來ている事を知らなかった。

人目が少ないのをいいことに、女子グループは、特にリーダー格の女子は、とても楽しそうに笑いながら、伊成の髪の毛を掴む。

「お前さ、最近ちょっと周りに助けしてくれる奴がいるからって、調子乗ってるよね？」

「勘違いしてるよね〜！」

ケラケラと笑いながら、グループはゆさゆさと首を揺らされる伊成を見ていた。

あいつらはいないか……

虎次と野吹の姿がない事を確認し、伊成は僅かに教室にいる数人に目をやった。

見ない振りをするもの、教室から離れるもの、基本的なスタンスとして、彼らは彼女らは関わりとうとしない。

ま、当然かな……

グイツと髪を引かれながらも、伊成は無表情を保ち、思索する。

やはりあの男がおかしいのだ。今更何を期待していたのやら……

伊成は乾いた笑みをこぼした。

それがリーダーの感情に火を点ける。

「……うっぜーわこいつ。余裕かましやがって」

髪に力が加わる。伊成の頭は、思い切り揺れて、そのまま机に叩き付けられる。

「痛っ……！」

多少の嫌がらせには慣れた伊成も思わず声を漏らす。

それ程に行き過ぎた暴力に、グループのメンバーも流石に焦りを見せた。

「ちよつとナナ……！流石に怪我させちゃマズいつて！」

「は？怪我なんて、普通に過ごしてたってするでしょ？ねえ、伊成？」

絶対の自信。こいつはチクらない。

伊成は目を伏せて、それを肯定する。

「いいこだね、伊成は。ほら、別に大丈夫だつて」

「でもさ……！」

「じゃあお前が庇う？」

リーダーのナナの威圧的な態度と脅迫に、止めようとした女子は口を噤んだ。

しかし、気分を害されたナナの苛立ちは収まらない。

「だんまりかよ。文句言つて悪いと思うなら態度見せろよ」

ナナは強く伊成の髪を引っ張り上げる。伊成はなすがままに顔を上げる。

「パーでいいよ」

「え？」

聞き返す女子にナナは声を荒げて言った。

「殴れって言うてんだよ！文句ないなら態度で示せ！」

女子は僅かに目に涙を溜めていた。震える手と伊成の顔を交互に見ている。

伊成はその様子を見て、ふうとため息をつくど、ぼそりと呟いた。

「叩きなよ」

「……やっぱグーだわ」

伊成の態度がナナを更に怒らせる。

更に怯える女子に、今度は伊成は目で語りかけた。

遠慮なくやりなよ。あなたが酷い目に合う必要なんてない。

女子は涙を浮かべた目で手を振りかぶった。伊成は目を閉じつつ、振りかぶった手のひらを広げていた女子に僅かに感謝しつつ、その手を受け入れた。

ハズだった。

「はよーっ！おひさー！」

教室に転がり込んできた聞き慣れない声が、女子の手を止める。

リーダーのナナは、その声にぴくりと反応を示し、伊成の髪を掴む手を離し、声の主を振り返った。

「茜？久しぶりじゃん！ってか、何始業式からサボってんの？」

「5月病でさー」

「今4月っしょ。相変わらず自由だねえ」

茜と呼ばれた女子は、どうやら始業式から今日まで学校を休んでいたらしい。

伊成は、何でこんなに声のデカい人に今まで気付かなかったのだろうと思ったが、休んでいたと聞いて納得した。

ナナと親しげに話すという事は、彼女もコレに参加するのかな？と伊成は考える。

活発そうで、さっぱりとした彼女がどんな嫌がらせをしてくるのか、全く想像がつかない。

事実、彼女の嫌がらせは、想像を遥かに超えるものだった。

「ん？何？何囲んでんの？」

鈍いのか、今更になって女子グループが机を囲んでいることに気付く茜。

「まさか、アイドルが転校してきたの！？」

「いや…そうじゃなくて」

「あたしにも顔見して！」

ナナの静止を振り切り、的外れな茜は人混みを掻き分ける。そして、髪を乱して目を伏せる伊成と対面する。

伊成の目に飛び込んできたのは、声のイメージとは違った、赤縁

メガネに三つ編みの、ナナとは正反対の地味な印象の女子だった。

「う、うお〜〜！可愛い〜！凄い色白！しかも綺麗な肌！触っていい？」

啞然とする伊成の返事を待たずに、茜はその白い頬をぶにぶにとつつく。されるがままの伊成。

「ぶにぶにしとる！気持ちいい！」

「ぶに」

伊成はみよんみよんと頬を引つ張られ、間の抜けた声を漏らす。啞然として見つめるグループ、それを眼中にも入れず、茜はぱつとその手を離れた。

白かった頬がほんのり桃色に染まっている。伊成は頬をさすりながら茜を見上げた。

「ごめーん！興奮しちった！だって餅みたいなんだもん！あー、でも惜しいわ……」

「な、何が……？」

「寝癖が酷い！流石にアイドルもカメラ前以外じゃ気を抜くか……」

乱れ髪を寝癖と言ったり、意味の分からない勘違いをしていたり、やたらと騒がしい茜に伊成は戸惑いっぱなしである。

「あ、あいどる……？ち、違……」

「え、違う？なんだ！でも、勿体なさすぎ！髪はもつと綺麗にしないとーそだ！整えたげる！カムヒア！」

グイツと手を引く茜。伊成はなすがままに困いから引つ張り出された。

そして、茜は今更になって、思い出す。

「あ！名前聞いてない！」

ぱっと手を離し、茜は伊成を振り返る。そして、にこやかに挨拶する。

「お初です！あたし、てんぐりあかかね天宮茜！仲良くしてね、親友！」

「い、いなり……つきね……です。よ、よろち……よろしく……」

「よろちくて！可愛いなあ、月音は！よし、もっと可愛くしたる！」

噛んだ……久しぶりに学校の子と喋ったから、焦って噛んだ……  
もっと練習しとくんだった……

放心状態の伊成は、そんな的外れな事を考えながら、引つ張られていく。

……苛められっ子、伊成月音の、このクラス初めての女友達は、勝手に親友になった騒がしい変わり者だった。

## 5話 く嵐上陸く

虎次はずっとその言葉を溜め込んでいた。

伊成と話す機会は物陰ランチの時くらいだったという事もある。しかし、何より虎次には掛ける言葉が見つからなかった事が大きかった。

授業中、ずっと考え続けて、ようやく見つけた言葉を遂に吐き出す。

「お前……それイメチエン？」

「……どうしてこうなった」

虎次も何となく気付いていた。これが伊成の意思でないこと。だって、この前「髪型変えるとか無いわー」みたいな事を言ったもの。

両手で顔を覆い隠す伊成、その頭には赤いリボンで纏めた尻尾のような髪の毛が二本。

漫画のようなツインテールである。

パシャ！

「伊成ちゃん……最高だぜ……！俺、これ待ち受けにするわ……！」  
「……！消せ！今撮ったの消せ！」

「うひょー！伊成ちゃんの顔が良く見えるぜー！いいじゃないの！  
イエアアア！」

「野吹、悪ふざけはその辺にしとけ」  
『はい、チーズ』

パシャ！

「言いながら何撮った!？」  
「記念に」

ニヤニヤしながら、携帯を仕舞う虎次。伊成はぐぐつと興奮を押し殺して、いまだに赤い顔のまま弁当の包みを解く。

「あれ？携帯は良いのか？」

「……別にいいですよーだ。どうせへし折る位しないと消さないでしょ」

「へし折らないのか？」

「……私を何だと思ってるの？人の物壊す訳ないでしょ」  
「昨日は殺されかけたけどな」

伊成は知らん顔で箸を進める。

それでも虎次はどうにも気になり、尋ねる。

「何で髪弄つたんだ？」

「……弄られた」

「弄られた？」

新手の嫌がらせか？虎次は首を傾げる。

「本当は戻したいけど……」

「何でだ？そこそ似合うぞ？」

「……馬鹿にして」

虎次はバレたか、と意地悪な笑みを浮かべた。  
やっぱりね、と拗ねる伊成。

……半分は本気で言っていたのだが。という余計な一言を虎次は飲み込む。

これ以上からかうのは止めてやるか。

「ちょっと厄介なのに絡まれちゃって……」

「厄介？」

「良く分からないけど……うん、厄介」

伊成の複雑な表情。虎次と野吹は伊成を間に挟んで顔を見合わせる。

伊成をそこまで知っている訳ではない2人だが、それでもその表情は珍しく見えた。

「……親友って、言ってた」

伊成の途切れ途切れの言葉からその意味を察する事は出来ない。しかし、虎次野吹の2人がその意味を聞き返す暇も与えないように、その『厄介』は嵐の如く襲来した。

「月音みつけ！何こんなジャングルでご飯食べてんの〜！」  
「むぐっ！」

後ろの草からバサーツと飛び出す三つ編み眼鏡。

驚いた伊成は口に含んでいたかまぼこを喉につつかえさせる。

咳き込む伊成の背中を、三つ編み眼鏡はけらけら笑いながらさすり、両サイドに座る。ヘンテコ男子に視線を送った。

「あり？なにになに？誰？月音ー！この冴えない男子誰？」

「さ、冴えない…？」

「ははは！トラ！遂に雰囲気イケメンを見抜かれおったな！冴えない…プツ！」

「…何、この下ネタみたいなの」

「ひ、ひでえ！つてか、『下ネタみたい』つて何！？」

三つ編み眼鏡と冴えない奴、下ネタみたいなのと顔真っ青の伊成。彼等は動きを止め、膠着状態に突入する。

その時、虎次は気付いた。

「…あ、伊成？おい、大丈夫…ヤバイヤバイ！顔色ヤバイ！」

「月音ー！大丈夫かー！？」

背中をバンバン叩く三つ編み眼鏡。伊成が必死で首を振る。

「伊成っ！吐けっ！死ぬぞ！？」

ふるふる……

「月音ー！」

ふるふる……

「リバーズだ伊成ちゃん！」

ふるふる……

容赦ない3人の背中連打に伊成は首を降り続ける。

そして、ピンチの伊成がようやく絞り出した一声は……

「……………意地でも……………吐かんぞ……………」

伊成は背中 of 殴打を振り払うように体を反らす！

驚愕する3人！

そして伊成は大気を吸い込むように、喉に食らいつく練り物を吸収する！

ゴクン！

そんな音が聞こえるかと思えるような荘厳な飲み込み……………腕を天に掲げる伊成を祝福するように、3人は湧いた。

「……………おおおおおッ……………」

叫びつつも、比較的常識人の虎次はふと思った。

(……………何だコレ)

ゲラゲラと一通り笑い終えた三つ編みメガネは、悪ふざけはここまでにしてと、自己紹介を始めた。

「やつほい初めまして！天宮茜、16歳！彼氏いない歴イコール年齢のスーパーシャイガールだにゃん 宜しクールビズ、イエイエイ  
イ」

うぜえ……

虎次の天宮茜に対する第一印象は容易に決定した。

それと同時に、怯えた猫のような目で天宮茜を見上げる伊成の様子から、伊成イメチェン事件の犯人がこいつだと即座に推理できた。

どや顔で自身の自己紹介を誇る天宮に、あからさまに嫌な顔を見せて、虎次は適当な自己紹介を返す。

「デニス・アンドウー12歳、飛び級してきた天才少年です。好きな教科は休み時間でーす」

「うおー飛び級カッコー！宜しく安藤！ハローマイフレンズ！ヤーハー！」

乗ってくるのかよ！面倒くせえ！まあ、適当言った俺が悪いけども！……ってか、安藤って誰だよ！

天宮に激しくシェイクハンドされながら、猛烈に後悔し心の悲鳴を上げる虎次。

いつ自分にその矛先が向くのかとビクビクしている伊成を余所に、野吹が嬉々として自己紹介を始める。

「ヘロー、ヤーハー！ワタシ、ケン・エドモンド！アメリカからやってきた黒船ネー！」

「オー！ナイスチューミーチュー！」

野吹も乗るのか、と発端となった事を恥じつつ虎次はようやく天宮の手を振り切る。

天宮はその手を次は野吹……いや、ケン・エドモンドに伸ばし、握手を要求する。

虎次はてつきり女好きのエドモンドの事、どうせ喜んで手を握る

と思っていた。

しかし、その予想は大きく外れる。

野吹は何故か握手を拒むように、首を横に振ったのである。

虎次がその意味を理解するのに、そう時間は掛からなかった。

「ノンノン！アメリカでの挨拶はあ……」

腕を広げる野吹。虎次はそこで野吹の意図を見抜いた。

しかしもう遅い。野吹のセクハラは止まらない。

予想通りの一言と共に、野吹が天宮に襲い掛かる！

「ハグデース！」

流石に天宮も女。いくらこいつでも野吹のセクハラに嫌悪を示し、突き放す筈だと虎次は考える。

野吹、やるな……こんな奴にまで主導権を握れるとは。

相手を取り乱させる天才に感心を寄せる虎次は天宮をじっと見つめる。

天宮はその目を見開き、迫り来る野吹を凝視する。

そして、拒むように手を伸ばし……

「オーケイ！ハグ！」

……野吹の体をひしと抱き締めた。

「……え？」

疑問の声を漏らしたのは野吹。

てつきり「来るな変態！」と殴り飛ばされるのかと思いきや、襲い掛かったのは温かく包み込む腕と、胸元に触れるむにむにした感覚。

「……………う、うおおおおお!？」

野吹は悲鳴を上げて腕を振り解く。そして、距離を取るかのよう  
に、地面に転がり込んだ。

藪に突っ込み、ようやく止まった野吹は、顔を真っ赤にして、激しい呼吸をした。

「む、胸があ、当たって……………!」  
「シャイか!」

虎次は思わず突っ込みを入れる。  
それと同時に、とてつもなく厄介な奴に絡まれた事に頭が痛くなる。

なんやかんやで、今の事態は相当に宜しくないものである。  
伊成との秘密の『契約』、それを知られる事はいらぬ波風を立てるに決まっている。それこそ、事態をさらに悪化させる可能性も否めない。

更に言えば、密会していた事実、伊成と虎次（ついでに野吹）が  
関係を持つ事自体、今のサポート体制を崩し、さらにはイジメの助  
長にも成りうる。

さらにはキツカケとなったレコーダーの中身が割れる可能性もあり、これが3人のピンチであることは明らか。

ならば、どう動くのが得策か、虎次は頭の中で計算を走らせる。

一緒にいたことは否定しない。否、出来ない。逆にその無意味な否定が、深入りを招く。

ならば何とかして、例えば弱みを握ってこいつを引き込むか？

無理だ。まずこいつは危険すぎる。見るからに口が軽そうだ。

しかも、そもそもこいつは伊成の状況を理解しているのか？この絡み方に、その意識が見えない。

虎次は名前と性質こそ今知ったが、クラスにいなかった女子生徒が1人増えていた事には気付いていた。

イジメグループと積極的に話している天宮を実際に見ている。

ならばこいつは敵かと考えると、そうは思えない。

伊成の表情からは、苦手意識こそ見えても、絶望的な色はない。

やはり伊成から話を聞きたいな……

虎次は状況を知らなすぎる。まずは知る必要があった。

しかし、それを妨げるような天宮の目……何とかしてこの状況は突破しなければならぬ。

ああだこうだと策を練る虎次、そんな彼に一筋の光を示したのは、思いもよらぬ一言だった。

「安藤は月音の何なのー？あ、もしかして……彼氏!？」

「「違う!」「

偶然だった。天宮のふざけた一言に、伊成と虎次が同時に反応したのは。

それが思わぬ方向へと事態を運ぶ。

「……そっか。やっぱりアイドルともなると恋愛もご法度か……」  
何を言っているんだこいつ、といった表情の虎次。「違う！」と  
悲鳴を上げる伊成。

天宮はにやりと笑い、2人の肩に手を置き、うんうんと頷いた。

「大丈夫……私、こう見えて口が固いから！目立つと困るもんね！  
黙っておくよ！」

「え？」

口軽そうな自覚はあるのか、とどうでもいいことに引っ掛かる虎  
次。

天宮は自信満々に胸を叩く。

「そして親友として、その恋を熱烈にサポートしてあげよう！いつ  
か、堂々とフライデーの前に顔を出せる位に立派なカップルにして  
やるぜ！うおおおお！燃えてきたああ！」

謎の雄叫びと共に、天宮は藪に飛び込む。

そして草に吞まれるように声は消え行き、やがてその気配は消え  
てしまった。

助かった……のか？

いまいち状況を掴めない虎次は周囲を見渡す。

顔を赤くして、目を伏せる伊成。

顔を赤くして、地面に転がる野吹。

なおも頭の整理が出来ないので、取り敢えず虎次は溜め込んでいた一言を吐き出すことにした。

「……………面倒くせえ」

## 5話 く嵐上陸く（後書き）

キーパーソン、天宮茜が協力者（？）入りです。

このあと、彼女のせいで話がおかしな方向に……

タイトルのレコーダーが活躍するのはもう少し後のお話……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6264p/>

---

正直レコーダー

2011年10月8日12時49分発行